

成長すること

香芝市立香芝中学校 1年 木下 暁葉

大人に「あなたは子どもの頃に戻りたいですか？」と聞いたら、おそらくほとんどの大人が「戻りたい」と言うことだろう。大人から見て、子どもの送る生活は楽で楽しいのだ。逆に、子どもに「あなたは大人になりたいですか？」と聞く。これも、おそらくほとんどの子どもが「大人になりたい」と言うことだろう。

だが、もし「ずっと子どものままでいたい」と言い出す子どもがいたらどうだろう。その子ども達は社会不適合者ということになるのだろうか。実は、私も「あなたは大人になりたいですか？」と聞かれたら後者を選ぶ。その理由は大人と同じ、子どもの生活が楽だから。でも、それだけではない。理由はいくつかある。

一つ目、親離れをしなくてはならないから。今まで何かがあったとき、守ってくれたのは誰か、ずっとそばにいてくれたのは誰か、それは親だ。親という存在があったからこそ、ここまで成長できた。私はいざ自立してみたら、どれだけ親が偉大な存在なのかと気付かされるだろう。だからこそ、親離れをするということが不安だ。

二つ目、大人になったとき、人間社会に順応していけるかわからないから。だが、こう言ったら世間は「大人はみんな順応してるんだからお前も順応するしかない」と言うことだろう。理不尽、プレッシャー、その他のいろんな困難に順応しろだなんて、そんなひどいことを平気で求めてくる人間社会は、どこかしらおかしくも感じてしまう。私は陽気な性格ではなく、気弱な性格だから、社会に出たとしてもいじめっ子気質の人にいじめられるかもしれない。そんなどす黒く渦巻いているように見える人間社会が恐ろしいとよく感じる。

三つ目、周りの同級生に置いていかれるのが淋しいから。勿論、周りが成長していくにつれ、自分も成長していく。そんなの当たり前だ。しかし、私は置いていかれていると感じてしまう。例えば、「あれ、この子ってこんなに身長高かったっけ？」や、「あれ、この子ってこんなに大人っぽかったっけ？」など。同級生がだんだん成長して行って、だんだん自分の知らない人になっていく恐怖。自分だけ成長していないと感じる孤独感。この淋しさを感じるのは私しかないだろうか。他の人達は、だんだん大人っぽくなっていく知り合いを見て淋しさを感じないのか、私にはよく分からない。

四つ目、今の環境が一番楽しいと思っているから。なんなら、学生以上に楽しい時期はないだろうと思う。課題として課せられている、この「少年の主張」の文字数を稼ぐのは大変だが、大人になって仕事をする方が大変だと思う。大人になったら今の友達と一生会えないかもしれない、遊べないかもしれない、それが私は嫌だ。大勢の同世代が集まった部屋で集団生活、親との外出、思い出作り、こんなにも充実している時期はおそらく子どものときだけだろう、私はそう思っている。

これまでいろいろ親がなんたらとか、順応がなんたらかたらとか、孤独感がどうたらとか、今が楽しくてどうたらこうたらとか書きなぐってきたが、結局は私の行き過ぎた妄想にすぎないのだ。私は小学校六年生のとき、ずっと中学生になりたくない、これ以上成長したくないと思っていた。中学生になったら今よりも大人扱いされるし、もっと勉強も難しくなる。それに新しい環境、新しいクラスメイトに慣れるわけがない。小学六年生の頃はずっとそう思っていた。しかし、いざ中学校に入学してみるとそうでもなかった。実際小学六年生のときに想像していたような厳しさもあまりないし、私はやっぱり陽気な性格ではないけれど、ほんの少しだが新しい友だちもできた。いや、もしかしたら私が成長して周りに溶け込む能力が伸びただけかもしれない。「大人になりたくない」という考えは未だに変わらないが、数年後自分が大人になったら「これ以上成長したくない」という考えは捨てるつもりだ。周りの同年代達に置いていかれてばかりでは流石に困るし、私が大人になる頃には親離れ、人間社会、同級生の成長、大人になってからの生活にも慣れていくか、そんなことすら忘れていくことだろう。しかし、私が大人になった場合、この「少年の主張を」を思い出したらどう思うだろうか。きっと「少年の主張を書いていたあの頃に戻りたい」と言うことだろう。私は大人になった自分を想像できないが、この葛藤を繰り返しながら大人に成長していくことが私にとっては大切なかもしれない。